

続・ふるさと こぼれ話

夏目漱石と「わだつみのいろ、この宮」

第52回

夏目漱石は明治40年、東京帝国大学英文科講師から朝日新聞の専属作家に転身した。

青木繁が東京府勧業博覧会に出品した「わだつみのいろこの宮」について、小説『それから』の主人公・代助に「いつかの展覧会に青木と云ふ人が海の底に立つてある背の高い女を画いた。代助は多くの出品のうちで、あれ丈が好い気持ちに出来てゐると思つた。つまり、自分もあゝ云う沈んだ落ち付いた情調に居りたかつたからである」と述べてさせている。

明治45年3月の「故青木繁君遺作展覧会」に出かけた漱石は、南画の師

津田青楓あてに「青木君の絵を久し振に見ましたあの人は天才と思ひます。あの室の中に立つて自ら故人を惜いと思ふ気が致しました」と書簡を送っている。

漱石唯一の美術評論である『文展と芸術』では、「自分はかつて故青木氏の遺作展覧会を見に行つた事がある。其時自分は場の中央に立つて一種変な心持になつた。さうして其心持は自分を取り囲む氏の画面から自と出る靈妙なる空気の所為だと知つた」と評している。

これらの小説や評論から、夏目漱石は美術的教養、美術眼を持つ、青木の生前からの共鳴者・理



▲岡本一平画『漱石先生』(東北大学附属図書館蔵)

解者であり、明治の文豪であつたといえる。それは少年期、実家にあつた多くの書画骨董に日常的に接していたこと、中村不折、黒田清輝、浅井忠、小山正太郎ら画家との交遊、イギリス留学やフランス万国博の折に両国の博物館や美術館を数多く巡つたことなどにより、当時のヨーロッパの芸術をわが物にしてきたからである。

編集後記

□今年もまた、暑い夏がやってきましたね。寒い時は「寒いのは、いやだあ」、暑くなれば「暑いのは、いやだあ」自分もそうですが…人間、おもしろいですね。

□先日知人に「顔が日に焼けたね」と言われました。自分では気付かなかつたのですが、日中の取材で多少日焼けしていたようです。昨年までは、庁舎内にいることが多く、日焼けするのは7月の祖母井神社の夏祭りの時?ぐらいでした。

■日焼け対策…気にしてなかつたけど…した方がいいのかな。(Y)

しまたがしの芳賀の自然

04 昆虫編-3



アサギマダラ
チョウ目タテハチョウ科
(写真提供=芳賀町自然に親しむ会)

分布=渡りをするチョウ
成虫は1年で本州と西南諸島・台湾を移動する。本州の高山帯で発生した子孫の個体が秋に南下する。

食性(幼虫)=ガガイモ科
(成虫)=ヒヨドリバナ科やアザミなど
毒性の強いアルカロイドを含む食草
大きさ=開張40~70mm(羽を広げた最大値)

■編集 芳賀町広報広聴委員会
☎028(677)6032 ✉kouhou@town.haga.tochigi.jp
■発行 芳賀町企画課
栃木県芳賀郡芳賀町大字祖母井1020番地
■芳賀町ホームページアドレス
http://www.town.haga.tochigi.jp
④芳賀町の携帯サイトはコチラから➡

